

二〇三三年九月二十九日

漆黒の海ニタ分けす月の道
大比叡襖を照らす良夜かな
名月のぽんと浮き出る蕘かな

かえる
もとこ
あひる

二〇三三年九月二十八日

露天湯に久闊を叙す星月夜
天高し音はすれども機影見ず
落ちさうで落ちざる風の芋の露

なつき
せつ子
千鶴

二〇三三年九月二十七日

露葎搔き分け進む犬の鼻
二上山が徐々に一つに野路の秋
いねやらぬことも又良し月の夜
待ち人に肩叩かれし十三夜
蜩蝶うごかす鉢について来る
霧晴れて富士の全容現れにけり
なだれなす明日香棚田の彼岸花

みきお
明日香
うつぎ
きよえ
あひる
澄子
あひる

二〇三三年九月二十六日

一家なし舗装を割りし猫じゃらし
藁屑を引き摺る靴や刈田行く

うつぎ
うつぎ
うつぎ

二〇三三年九月二十五日

月光を漁るごとく投網打つ
参磴の左右を綴りし曼殊沙華
手を振ればピエロ手を振る秋うらら
陸墓古りて盗人萩の野となりぬ
母訪へば庭から声や小鳥来る

素秀
せいじ
なつき
ぽんこ
むべ

二〇三三年九月二十四日

爽やかに会釈池塘のジョガーどち
裾払ふ盗人萩の狼藉に

はく子
もとこ

二〇三三年九月二十三日

膝掛けをそつと渡され通夜の席
峠道触るるばかりに天の川
新米の湯気包み込み塩むすび
リハビリの手に転ばせる椿の実

こすもす
澄子
千鶴
満天

毎日句会みのる選・二〇三三年一〇月一日